実学の系譜について
～福澤諭吉を手掛かりに～

2025年6月

学長補佐
石井 泰幸

１－1．実学の背景

福澤諭吉（1835～1901）

- 豊前（現大分県）中津藩の下級武士の次男として大坂に生まれる。
- 緒方洪庵の適塾で蘭学を修めたが、横浜でオランダ語が全く通じないことに衝撃を受け、独学で英語を勉強する。
- 幕府の遣欧米使節に3度参加し、『西洋事情』などの著作を通じて日本に欧米文化を紹介した。
- 33歳で慶應義塾を開設する。
- 『学問のすゝめ』、『文明論之概略』など著書多数。

1 -2. 実学の背景

・福澤の論語について

・『学問のすゝめ』13編において『論語』を批判している。

・特に孔子が真の聖人で遠い後世を鋭く考察できる見識があったなら、権威で束縛する道に満足するはずがなかったはずだとした。

・福澤の批判意図は、その考えを無批判に現代に当てはめる行為に対してである。

・実際、明治期の『論語』の解釈は南宋の時代に朱熹により確立された朱子学であったが、実際には、江戸時代から確立した林羅山の朱子学に基づくものであった。

1-3．実学の背景

・本来の論語
　・孔子は、仁と礼を重んじ、孟子は、それの考えを援用して、仁、義、礼、知の四徳を唱えた。

・朱子学への変奏
　・孔子から1500年後、朱熹は説いた朱子学は、孔子、孟子の核である仁よりも礼を重んじ、特に、朱子学は情と欲の考え方を否定することとなった。

・福澤の論語批判
　・福澤は、この朱子学を受け入れることができなかった。また、福澤以前においても、江戸の陽明学派や古学派、さらには国学がこの朱子学を批判していた。

2-1．実学とはなにか

・福澤の真意

・福澤は全面的に『論語』を否定していたわけではない。

・1898年（明治31年）、「時事新報」の「排外思想と儒教主義」、翌年刊行された『福翁自伝』で述べている。

・実際、福澤が批判したのは林羅山の朱子学であり、林家の思想の核であった士農工商の名分論であった。

・その名分論は、商人に暴利をむさぼらせ、道徳を失わさせたとした。

・しかし、実際は、渋沢栄一も『論語と算盤』で述べているように、論語は経済と道徳を一致させるものだと福澤は考えた。

2-2．実学とはなにか

・実学を獲得する前提

・福澤は、この士農工商を乗り越えるため「独立自尊」を掲げた。

・これは旧来の価値観から脱却し、自由な個人が新たな価値観を形成し文明社会を確立するものであった。

・そしてこの独立自尊の概念の中核には「経済的自立」であるが、この独立とは「他人の財に依らざる独立」「有形の独立」「自労自活」を基盤であるとした。

・これが実現されて初めて「無形の独立」が可能となり、士農工商を乗り越えた対等の社会関係が成立するのである。

2-3．実学とはなにか

・独立自尊の獲得のために

・福澤は、日常生活に必要な実践的知識を備えた「実学」が独立自尊を確立させると述べている。

・実学を学ぶということは科学的原理を解明し、現実世界に適応する実践的批判的精神を基盤とし、「自由な個人の自己意識の形成」を養うことである。

・福澤の『学問のすゝめ』から

・初編において、福澤は実学を「人間普通日用に近き実学なり」と説明しており、実なき学問は後で学ぶものだと述べている。

・そして実学の種類を「手紙の言葉、簿記、算盤、計量、地理学、物理学、歴史学、経済学、倫理学」とした。

3-1．実学教育の核心

・福澤の実学の思い

・実生活も、実際の経済も学問、そして、現実の世の中の流れを察知するのも学問であり、和漢洋の本を読むだけが学問ではない。

・その意味で、本来の学問を補完する実学を学ぶことは、自らの才能や人間性を高め、政府と同等の地位に上ることであると福澤は述べているのである。

・福澤の核心

・そこで、福澤が重視した和魂洋才の思想が確立されたのである。

・それは、実学の本質である明治時代の士農工商を乗り越えるものであった。

3-3．実学教育の核心

・福澤の核心２

・実際士農工商は儒教的な名分論であって、実学の本質は『学問のすゝめ』の冒頭にあるように「天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず」というものである。

・しかし、実のところ福澤はこの実現が難しいがゆえに士農工商を乗り越える実学を学ぶべきだと強調した。

・ならば福澤は何を実学教育の中で目指せといったのであろうか。

・それは独立自尊であり、一身独立した個人の確立である。そしてその個人が人間関係を構築し、その関係性を深めていけば国が栄える。これが福澤の実学教育への希求である。

参考文献

・生越利昭「明治啓蒙における経済思想―福澤諭吉を中心に―」経済学史学会『大会報告集第74回全国大会』2010年、26–30頁
・生越利昭「福沢諭吉の『自由』と『個人主義』―西欧文明の導入と転位―」神戸商科大学『人文論集』第39巻3・4号、2004年
・杉山忠平『明治啓蒙期の経済思想』法政大学出版局、1986年
・城島明彦『福沢諭吉と渋沢栄一』青春出版社、2020年
・福沢諭吉『文明論之概略』（松沢弘陽校註）岩波書店、1995年
・福沢諭吉『学問のすゝめ』岩波書店、2008年
・野間口隆郎「日本的経営の源流『合本主義』に関する考察」国際経営学論集、第2号、2023年
・丸山真男『「文明論之概略」を読む』上・中・下、岩波書店、1986年
・村上泰亮『反古典の政治経済学』上・下、中央公論社、1992年